

日本作業科学研究会ニュースー作ら， さくらー第 11 号



発行年月日 2012 年 1 月 25 日
発行者 日本作業科学研究会広報係
ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

臨時 総 会 報 告

日本作業科学研究会会長
港 美雪

新しい年が明け、会員の皆様におかれましては、様々な期待を胸にこの新年を迎えられたことと思います。さて、昨年 12 月に開催致しました臨時総会へのご協力、ありがとうございました。投票結果につきまして、ご報告させていただきます。

平成 23 年 12 月 9 日～23 日に臨時総会開催後、12 月 24 日に事務局により開票、12 月 27 日に理事会で開票結果を確認致しました。開票の結果、会員の 3 分の 1 以上の投票により、臨時総会は成立しました。投票総数は 75 票、投票の内訳は以下の通りです。

1 案に賛成	23 票
2 案に賛成	18 票
多数意見に賛同	32 票
無効	2 票

この結果により「第 1 号議案 会則の変更ー役員再任の制限」について、以下のよう
に会則を変更致します。変更後の会則は、平成 23 年 12 月 27 日からの実施と致します。

【現行】

役員任期 第 9 条

1. 役員任期は、1 期 2 年とする。但し、3 期以内の再任を妨げない。

【修正後】

役員任期 第 9 条

1. 役員任期は、1 期 2 年とする。但し、5 期以内の再任を妨げない。理事が会長に

なった場合、会長になった時点から 3 期以内の再任を妨げない。

〔追加申し合わせ事項〕

- ・理事に立候補する際、理事期間、担当、抱負などの立候補理由を会員に公開する。
- ・理事が会長となり、6 期目以降の立候補になる場合は、立候補理由、会長任務の抱負などを会員へ公開する。
- ・役員任期について（会則第 9 条 1）、総会での審議を継続する。

会員の皆様のそれぞれの思いを様々な取り組みとして開花させることによって、研究会の歩みを着実に進めていきたいと思っております。今後とも、積極的なご意見、ご参加をよろしくお願い致します。

以上

第 15 回作業科学セミナーの報告

県立広島大学
吉川ひろみ

2011 年 9 月 24、25 日、「作業科学と社会」をテーマに、県立広島大学（三原市）で開催された第 15 回作業科学セミナーには、183 名（公開講座のみ参加 10 名を含む）の参加がありました。佐藤剛記念講演では、近藤敏さん（県立広島大学教授）が、20 代の佐藤先生のお写真を見せてくださり、誘いの名人だったと語りました。感覚統合、作業科学、理論の重要性を知るように誘ってくださったそうです。両手に団子を乗せて差し出す高齢女性の遺影、ラグビーを通しての人種間対立解消を描いた映画「インビクタス／負けざる者たち」

など，作業の重要性が心に残るエピソードが紹介されました。「病院での作業」の演題では，言語聴覚士 1 名と作業療法士 2 名が日常の実践の中で，個人の作業を通して人や状況がどのように変化したかを発表しました。ワークショップは，テーマ別にグループ討議を行いました。結果は，模造紙にクレヨンで記載され，翌日掲示されました。懇親会は約 100 名が参加し，時間を過ぎるのも忘れて語り合う姿が見られました。「多様な状況での作業」の演題は，退職移行，精神障害者との就労経験，少年院での作業，障害をもつ青年の就労移行の演題がありました。特別講演では，岡本三夫さん（広島修道大学名誉教授）が，非平和，構造的暴力など平和学の基本概念を説明してくださいました。「戦争がない」といった否定語の後にくる平和ではなく，経済や政治の安定，基本的人権の尊重，公正な法，政治的自由と政治参加，安全な環境，民主的人間関係などがあるという肯定語の後にくる積極的平和という考え方を教えていただきました。ゲイル・ホワイトフォードさんの（マッコリー大学教授）基調講演では，人権は大事けれども作業療法実践には関係がないと考える作業療法士がいるという事実をとりあげ，作業科学も作業療法も何を最終目的（Ends）とするかを意識する必要があり，それは人権尊重の上に可能となるソーシャルインクルージョンであると力説され，世界人権宣言を表現する 映 像 (<http://www.youtube.com/watch?v=hTlrSYbCbHE>) が流されました。そして，意味のある作業の可能化やエンパワメントは，ソーシャルインクルージョンに近づく有力な方法であると述べ，具体的な行動を考える上では，参加型作業的公正枠組み（Kronenberg 他著，Occupational Therapies without Borders - Volume 2 の第 8 章参照）が活用できると紹介されました。公開講座では，市民団体「つく

ろう三原」のメンバー 4 名により，自分と社会のためにできることに取り組んでいる様子が語られました。作業の視点で社会を見つめ，どのような社会が理想かを思い描くときに立ち現われてくる状況を，作業的公正（occupational justice）と表現できると思います。それは，すべての人が自分にとっても社会にとっても意味のある作業に結び付くことができる社会です。本研究会の活動が，作業的公正の具現化に貢献することを祈ります。

作業科学セミナー実行委員報告

岩国市医療センター医師会病院
中澤紀子

第 15 回作業科学セミナー実行委員会では，委員一人一人がやりたい作業をしようという吉川先生の提案の下，役割を決めました。私の担当は事前参加申し込みと講師の Gail さんご夫妻の広島観光案内。私の好きな作業の一つに，自分の生まれ育った広島，日本の文化や伝統を外国語で伝えるという作業があります。今回の役割はこの作業を行う絶好のチャンス！せっかくのおもてなしですから，粗相があってははいけません。事前に下見をしたり，情報収集をしたりと入念に計画を練りました。

そしてやってきた観光案内当日。平和記念資料館の見学で，原爆投下直後の街のジオラマを見た Gail さんがショックを受け号泣されるという事態が…想定外の出来事です。気を取り直して渡った宮島厳島神社では，運良く蘭陵王の舞楽奉奏に出会えました。これは嬉しい想定外。休憩に立ち寄ったカフェでは店主さんの親切により，夕日に輝く大鳥居と瀬戸内海の眺めを満喫。そして一日の締めくくりは広島風お好み焼き。Gail さんご夫妻も楽しんでくださり，何より自分自身が一番楽しむことのできた一日でした。

今回の観光案内という作業は，広島や宮島について調べるとい作業へと繋がりました。

この作業の中で多くの人との会話が生まれ、そして新たな興味として英語による広島観光ボランティアという作業が見つかりました。振り返ってみると、もちろんセミナーで得たものは多くありましたが、実はセミナー以外で得られたことの方が大きかったのではないかとすら感じられます。身を持って作業の良さや連続性を感じられたこと、委員を務めた皆さんとの出会い、どれも刺激的でした。そして作業についてもっと知りたい、作業科学をもっと学んでいきたいという思いは一層強くなりました。セミナー、委員会で得られた知識、皆さんのご縁を大切に育てていきたいと思います。ありがとうございました。



作業科学セミナー感想

西宮協立リハビリテーション病院

中原啓太

今回はじめて作業科学セミナーに参加した。私自身が学生時代に作業科学の授業はあったが、卒業し職場で具体的にどのようにこの知識を使うことができるのかわからずにいた。自然と医学モデルの知識を勉強する機会が多くなった。しかし、クライアントと接するうちに、本当にこれで人を見られているのか疑問に思うことが多くなっていた。

作業科学セミナーの初めに講演をしていた近藤先生の内容がとても心に残った。内容は近藤先生の過去、現在、未来を作業の視点からみていくものであった。自分も好きなスポーツ選手の言葉からその人を構成している作業について分析をしていた。イチロー選手の生活には義務はなく願望の塊で、あるサッカー選手は義務を誇りにおもっているという表現をしていた。両者ともにそれぞれの人生の文脈の中で形成されてきた思考性があり、健康であり、素晴らしい成績を残している。自分自身の事を作業的視点で整えている人は健康的で力強く生きているような印象を持ち、その反面に疾患がなくても作業的に不公正である人を作業療法の対象として捉える事が出来ると感じた。

そこで自分の臨床を思い出し、担当しているクライアントの変化を思い出した。なぜかというところ担当していた患者さんは父親としての役割を振り返って義務でもあり、願望としての作業であることを表出してくれた。自分の役割を確認したその日から病院生活でも積極的に行動するようになった。ただ病前の生活を整えてフィードバックしただけで役割を意識した行動になった。

人にとっての作業は、ほとんど意識されないものである。しかし、自分にとっての作業

や自分らしい作業の意味を理解している人は強く健康的な人が多い。作業療法士として作業を学ぶ喜びを感じることが自分にとっての意味ある作業だと思う。これからも作業を学び続けようと思える先生方や仲間と出会える場所が作業科学セミナーにはあると感じ、次回も参加したいと考えている。

県立広島大学作業療法学科 3 年

衣笠真理恵

初めてのセミナー参加でした。学生でも理解できるのか不安もありましたが、非常に意義深い 2 日間になったと思います。特に WS のディスカッションが印象的でした。臨床で活躍する OTR の方との交流機会はあまり無いので、とても貴重な時間でした。学校では知ることが難しいことも知ることができました。例えば、そのクライアントにとって意味がある作業で他職種から見ると治療的に見えない作業（旅本を見る等）を OT で行なう場合、診療報酬を請求できるかという質問に対し、多くの OTR の方が診療報酬をとっていると言われ、安心し希望も感じました。意見を発言でき、有意義な時間だったと思います。私は OS の授業から OT の魅力を感じられるようになりました。OTS としての時間のみならず、いつでもその考えは応用できるので OS は魅力的だと思います。OTR として、一人の人間として充実した人生を送る為にも、またこのセミナーに参加し新たな発見をしたり考えを深めたりしていきたいです。

知七十一は札幌！

第16回作業科学セミナーのご案内

札幌医科大学

坂上真理

「作業科学からの架け橋：作業療法へ，学際領域へ，そして未来へ」をテーマに，2012 年 7 月 15 日（日）と 7 月 16 日（月・祝）に札幌医科大学（北海道・札幌市）で開催します。7 月 16 日（月・祝）の基調講演には，アメリカ・イースタンケンタッキー大学のドリス ピアース先生（Doris Pierce 先生）をお迎えし「Building Occupational Science」をテーマにご講演いただきます。ピアース先生は，作業科学のバイブル書の 1 つである『Occupation by Design』の著者で，作業療法への応用を含めた作業科学のお話をさせていただきます。また，16 日には，“作業科学の母”である南カリフォルニア大学名誉教授のルース ゼムケ先生（Ruth Zemke 先生）をシンポジストに作業科学のこれからについてディスカッションするほか，文化人類学者の道信良子先生（札幌医科大学）の特別講演も予定しています。

15 日（日）は，佐藤剛記念講演を近藤知子先生（帝京科学大学）に，ワークショップのファシリテーターを小田原悦子先生（聖隷クリストファー大学）にお願いして，参加される皆様の作業と作業科学が深められる興味深い内容になっています。このほか，演題発表も 15 日（日）に予定しています。札幌チームでは，「もう一度，作業科学セミナーを札幌で！」を合言葉に，一昨年から準備してきました。日本に紹介された時はまだ「赤ん坊」だった作業科学も，世界中の多くの人々に大切に育てられて，1 つの学問として成長を続けています。今回のセミナーを通して，お一人お一人の参加者が作業科学との向き合い方を見つけていける札幌セミナーにしたいと思

っています。事前申し込み、演題登録は 2 月からを予定しています。参加費や詳しい日程が決まりましたら、随時研究会ホームページに掲載いたしますので、ご覧ください。夏の北海道で、皆様と一緒に充実した 2 日間を送れることを楽しみにしております。

<問い合わせアドレス>osseminar16@jssso.jp

(広報係注:ニューズページ一番後ろに美しいポスターも掲載しております。)

理事会議事録

平成 23 年度

第 1 回日本作業科学研究会理事会 議事録

日時:平成 23 年 9 月 23 日(金) 16:00~

場所:広島県三原市港町 1 丁目 2-26 NP

O 法人 ちゃんくす

出席者:港, 村井, 近藤, 青山, 古山, 酒井, 西方, 西上, 坂上

【議題と報告】

1. 第 6 回総会について(港)

1) 会則の変更の経過の説明:

①任期の変更の理由

- ・期限を区切らず、理事がしたい人が行えるように会則を変更。
- ・今後様々な事業を企画するためには、ある程度同じ理事が必要。
- ・理事が半分入れ替わると現状以上のことをするのは難しい。
- ・組織が大きくなり、事業計画や組織のあり方を見直す必要がでてきた。
- ・意思があっても立候補して受からなければならぬ。本当にできるかは選挙による。立候補するチャンスを残してほしい。
- ・会長も 2 年しかない。やりたいことができないのではないかと。

2. 第 15 回 OS セミナーについて

- ・事前登録は 136 名
- ・Gail さんの支援基金講演が入り、三原 TV で放映されることになった。

3. 16 回 OS セミナー(坂上)

・日程の確認→7 月 15 日, 16 日で承認

・佐藤剛講演→近藤知子さんで承認

4. 第 17 回 OS セミナー

・大会長を酒井ひとみさん(大阪市)で承認。
→第 2 回理事会で再議題

5. 各担当からの報告と検討

1) 機関誌(村井, 青山, 酒井)

・研究論文 2 件。セミナーの講演録を掲載。
・タイムスケジュール HP にのせた方がよい。
→たたき台を機関誌担当で作成。理事に承認してもらった後に HP へアップ。

・投稿論文の採択の最低条件→作業の知識が書かれていること。実践報告で書かれたものと作業との関連づけの問題あり。

・普通の事例報告なら、他に出す機関誌がある。“作業を通じて”という点を言葉にする必要あり。

→作業の知識をいれるならば、それを採択していく方向で。具体的な規定、内容を機関誌担当で、検討し、たたき台を理事会に出してもらう。実践の報告(事例、作業をいれた実践等も含めて)。

2) HP(西方)

①HP アクセス件数

2011 年 9 月 1 日時点:28986(前月比+754)

②メーリングリストについて

・登録できる人数等に制限なし。一通あたりの ML のサイズの目安が 50KB。
・次回総会までに動かすことを目標にする。

③IT 管理者

・IT 管理者の継続で依頼。

3) 広報・研究会ニュース(近藤, 西野)

・9 号:2011 年 1 月。10 号:2011 年 8 月に発行した。

・JOS の 17(3) 翻訳完了。事務局, 国際交流に送付した。

・JOS の 17(4) は、ほぼ終了。

・JOS の HP から日本語の部分がなくなった。
→確認必要。

・メーリングリスト
～上江洲さんに運営をお願いする。OS 情報、知識の確認。勉強会、研修会の紹介。（組織間の勉強会のお知らせ）。来年の総会までは運用できるようにしたい。

5) 総括

①会議の仕方

・三役会を skype で行った。

②事業計画に関わるブレインストーミング
→結論：

1) 研究会の目的を以下の 3 つにする。

- ・作業科学に興味がある人を増やし持続する
- ・作業科学研究者を育てる
- ・作業を実践に結びつける

2) 事業計画

- ・OT 学会のワークショップ
- ・研究法の研修会
- ・作業の知識を実践につなげる研修会（仲間さんの実践）
- ・研究助成基金（震災対応を含む）

③演題採択

- ・前回作成した理事の演題採択案に「原則として」と「日付」を入れる。札幌から採用。
- ・理事以外の方が大会長の場合は、2 年前から理事会に参加してもらうことを確認。

第 2 回日本作業科学研究会理事会 議事録

日時：平成 23 年 9 月 25 日（日）12：00～

場所：県立広島大学

出席者：港，村井，近藤，青山，小田原，古山，酒井，西方，西上，坂上

【議題】

1. 会則変更の件

「“3 年まで”の文言は削除することで可決されたが、任期に制限をつけることが可決された。」

→以下のスケジュール，案で承認された。

1) 今後の進め方（スケジュール）

- ・1 か月後に会員にパブリックコメントを求

める。10 月末に会員にメールが送れるように準備を進める。

・会員からは 11 月 15 日意見をもらう。

・11 月 30 日までに理事会の意見をまとめる。

・メールによる臨時総会。

・1 月研究ニュースで結果のお知らせ。

2) 任期の制限

・任期を 5 年で意見を求める。

2. 第 17 回 OS セミナーについて（酒井）

→以下のように承認

・第 17 回は理事と一緒に福島で OS セミナーを行う方向で準備を進める。：相談役－酒井。協力者－理事全員。実行委員長－太田総合病院附属太田熱海病院。齋藤佑樹。

3. JSSO の事業計画：研修会，調査について（西上）

・前回の理事会をうけて，事業計画案が提出された。

・2012 年総会で予算決定することを了承。

・2013 年はワークショップと研修会を行う方向で企画する。

・西上さんを代表者として煮詰めていくことで確認。

第 3 回日本作業科学研究会理事会 議事録

日時：平成 23 年 12 月 27 日（火）

場所：オンライン会議

出席者：港，村井，近藤，青山，小田原，古山，酒井，西方，西野，西上，齋藤，坂上

【議題】

1. 臨時総会結果について

1 案（5 期） 23 票

2 案（4 期） 18 票

多数意見 32 票

無効 2 票

合計 75 票／185 名（61 票以上

で総会成立）→臨時総会の成立と結果について承諾。

シリーズ **作業を考える@東北**

作業科学研究会の会員皆さんにも強いインパクトを残した東北大震災。風化せず、どこまで私たちは被災した人と地域により添えるのか試されていると感じています。

「作業を考える@東北」を通し、阪神淡路大震災、新潟地震、昨年多発した大雨被害など、自然災害の中で個々ができることを考えませんか。投稿もお待ちしております。（広報係）

「帰る」ということ

財団法人太田総合病院附属太田熱海病院
齋藤佑樹

大寒の頃、未曾有の大震災から早くも 10 ヶ月が経ちました。福島は今年も厳しく、震災直後ガソリンが手に入らず、吹雪のなか子供の手を引きながら徒歩とバスで通勤した日々を思い出します。ライフラインの断絶、食料やガソリンの枯渇。道路や建物の損壊。そして今も続く放射性物質飛散による外出や食料に対する恐怖。あの日から私達の多くの作業が剥奪され、多くの作業の意味や形態が変化しました。これまでに警戒区域で生活している施設入所者の受け入れや、避難中の未就学児童に遊び場を提供する活動など、微力ながらもいくつかの支援に携わってきました。私の勤務する地域は内陸部のため、幸いにも津波の被害にあったクライアントはいませんが、自宅が倒壊したり、原発事故による警戒区域指定により住み慣れた景色を失ったクライアントが何人も入院してきました。障がいと震災被害という二重の重荷をクライアントやその家族は背負っていたのです。しかし絶望的な日々の中で感じた希望はやはり作業の力でした。家族のために行う家事。昔から続けてきた編み物。同世代の仲間とのお茶飲み。長年担い続けた役割作業や充実した余暇を作ってくれた趣味作業。大切な人達とのコミュニケーションなど、沢山の作業が悲

観するクライアントの時間を埋めてくれました。そして、大切な環境との結びつきを取り戻してくれました。震災の傷跡は深く、特に放射能被害が深刻な福島県は、復興に途方もない時間と英知を必要としています。多くのクライアント達が帰る場所には、もう見慣れた景色は無いかもしれません。しかし大切な作業に従事して、大切な人達と結びつき、新しい環境を大切に想えるような、自分の生活を再び好きになれるような、そんな支援を続けたい。そんな想いであの日からクライアントに向き合ってきました。復興に取り組む過程で改めて感じることは、その協働のプロセスが決して特別なことではなく、作業療法の在り方そのものだったということでした。

理事の小田原さんの尽力があり、事務局より昨年末に会員皆様にクリスマスプレゼントが届きました。皆さん JOS の HP からパスワードを入れると会員限定で以下の情報を得ることができます。まだご覧になっていない方、ぜひサイトに行ってみてください。

作業科学論文翻訳掲載のお知らせ

聖隷クリストファー大学

JSSO 国際交流担当 小田原悦子

作業科学は人々の健康を促進することを目的として作業の視点で人間を、生活を探究する学問であり、臨床である作業療法に貢献します。学会で会う作業療法士からよく「作業科学に興味があります。でも、よくわかりません。」との声を聞き、「学生に教えたいので、適当な日本語の資料を紹介してください。」という、養成校の先生にもお会いします。英語の専門誌には論文があるが、入門者用の作業科学の教科書はアメリカでも出版されていません。おもしろそうだが、よくわからない、というところでしょう。

今回、1993 年にアメリカの代表的な作業療法の教科書である「Willard & Spackmann の

作業療法 第 8 版」に掲載された作業科学論文「Developing an academic discipline: the science of occupation ある学問を発展させるということ:作業科学」からの抜粋の日本語訳を, 日本作業科学研究会のホームページに掲載しました. お世話になった Clark 先生, Zemke 先生, 翻訳, 掲載を許可してくれた出版社への感謝をこめて, 会員の皆様に経緯を紹介させていただきます.

このプロジェクトは, 2011 年春, JSSO の会員の皆様にもおなじみの Zemke 先生から, 作業科学に興味のある日本の作業療法士にも, 作業科学をよく知らない他領域の人々にも, 作業科学の理念・知識を知ってもらうために, 作業科学の紹介にふさわしい論文を日本語に翻訳して JSSO の HP に掲載するというアイデアが出されたことから始まりました. JSSO の理事会が了解後, Zemke 先生が, 著者である Clark 先生に依頼し, Clark 先生が出版元である Wolters Kulwer 社に, JSSO が本論文を翻訳することを許可してほしいと依頼しました. その後の出版社との交渉に半年もかかりまし

た. 当初 3 論文が候補に上がっていましたが, やっと, 本論文の 25 の抜粋の翻訳と HP 掲載に漕ぎつけました. 抜粋は Zemke 先生が, 翻訳は小田原が担当しました.

会員の皆様にタイミングよくクリスマスと新年のプレゼントを届けることができ本当に嬉しいです. Clark 先生, Zemke 先生, 出版社との交渉でお手伝い頂いた Clark 先生の秘書の Stephanie Milkea さんには, 日本のクリスマスカードをお送りしました. (広報係注: 上記の写真がクリスマスカード)

以上報告いたします.

出典は以下の通りです.

Clark, F. and Larson, E. (1993). Developing an academic discipline: the science of occupation. In H. Hopkins, & H. Smith (Eds.), *Willard and Spackman's Occupational therapy* (8th ed., Chapter 3, pp. 44-57). Philadelphia: J.B. Lippincott.

日本作業科学研究会のメーリングリストが始動準備中です!

沖縄ではすでに OS グループのメーリングリストが稼働しているそうです. JSSO では広報係が中心に準備中です. 春に始動目指して目下準備中です! 沖縄県のメーリス現況を寄せてもらいました.

沖縄作業科学研究会による

メーリングリストの試み
日赤那覇市安謝福祉複合施設
上江洲聖

沖縄作業科学研究会(作業を問う会)は, 発足と同時にメーリングリスト(ML)を活用しています. 勉強会は毎月 1 回約 2 時間しか確保できなかったため, 事前に抄録を共有して質疑の要点をまとめ, 勉強会が終了した後の意見交換を促進することで, 議論を深めることを図りました. ML では論文, 文献を互いに紹介し, 解釈について意見交換すること



ができました。特に、勉強会中には発言が少なかったメンバーも、意見を発することが可能になったと感じました。他にも ML は、家庭、業務の都合や開催地の条件で、勉強会に参加できないメンバーの Occupational Justice を保障することにもありました。勉強会に参加できなかった OT が、ML の議論に参加できることを意識しています。

活用を始めて 2 年が経過した現在は参加者が約 80 名になり、作業科学に関連しそうな研修会情報や、臨床で直面している課題などについて共有しています。情報の共有スピードは一瞬、意思決定は勉強会開催日を待たずに実現され、情報の一方的な受け渡しではなくて双方向性なので参加意識が高まる、職場で OS の視点を伝えようと孤軍奮闘している OT の支援などのメリットを感じています。

メンバーは原則として勉強会参加者の中で、ML 参加を希望する方に限定していますが、何人かは特例がいます。他県に在住してその地域に OS 勉強会が存在しない OT、当勉強会の支持をしてくださっている OS 研究会理事の方々です。理事や OS 院生、院卒業生が近隣地域に存在しない、沖縄も含めた地域にとって ML は Occupational Justice を実現するためのアプローチになると考えています。もし、ML が日本全国規模で展開されるようになれば、貢献はさらに大きく、広く、深くなると思われます。

台湾作業科学シンポジウム報告記

介護老人保健施設 愛と結の街
村井 真由美

私が第 13 回作業科学セミナー（福岡，2009 年）の実行委員をした時に基調講演の講師として国立台湾大学の Jing-Lin Lo さんを招致しました。このセミナーのテーマがネットワーク作りでしたのでアジアでの作業科学のつながりを作りたいと思っていました。チャンスを作って台湾の作業科学シンポジウムに参加



したいと考えており、Jing-Lin Lo さんに毎年予定を教えてもらっていましたが、台湾のシンポジウムはいつも日本のセミナーと時期が近く、私はまとめて休みを取ることが難しかったため参加を見送っていたのですが、2011 年は時期が離れたので参加することができました。2011 年は第 4 回で、日程は 12 月 2 日（金）、3 日（土）、台北市の国立台湾大学で開催されました。参加者は 30~40 名で作業療法士のみでした。1 日目はワークショップでテーマは「作業を基盤とした療法-ICF の観点から」というテーマでした。講師は 2010 年日本に第 14 回作業科学セミナーの基調講演に来て下さったニュージーランド・オークランド工科大学の Clare Hocking さんでした。最初、Hocking さんから ICF の講義があり、その後分野別（高齢者、発達障害、精神障害、脳血管障害）のグループに分かれ、グループの 1 人がクライアントの情報を提供し、メンバーでそのクライアントがなぜ作業療法に来たのか、ICF の観点からどういう人なのかを捉えるという作業を行いました。作業プロフィールも作り、ICF に足りない作業の視点は何かを挙げました。次にクライアントにとって必要な評価、目標の設定、目標達成のための介入方法を立てるという作業を行いました。私では

つきり中国語でディスカッションが行われるのと思っていたのですが，私のグループは英語で行って下さいました．台湾の作業療法士が英語を話せるのは，教科書がほとんど英語で，将来的に海外への留学を念頭に置いているからだそうです．最後に Hocking さんが「作業の視点から ICF に欠けているもの」というテーマで講演してくださいました．乾癩のクライアントにインタビューした研究結果で，結論として ICF にはクライアントの主観的な経験と時間的なもの（過去，未来）が不足していることを確認することができました．2011年2月に東京で Ann Fisher さんから受けた OTIPM（作業療法介入プロセスモデル）の講義に通じるものがあり，作業の視点からクライアントを捉えること，そのための評価と目標設定，介入の記述は作業療法にとって非常に重要であることを認識しました．2日目は，講演，シンポジウム，演題発表がありました．講演は Hocking さんの「作業の健康やウェルビーイングへの貢献」というテーマで作業と健康，ウェルビーイングに関する研究の紹介が行われました．シンポジウムの一つは，Hocking さんの講演と同じテーマで3名のシンポジストが認知症や脳血管障害，地域での実践を通して作業と健康，ウェルビーイングの関係について報告がありました．2つめのシンポジウムは「作業の力」というテーマで私もシンポジストとして介護老人保健施設での実践を話させていただきました．他のシンポジストは，青少年を対象とした作業療法トレーニングプログラム（OTTP：米国・南カルフォルニア大学大学院での取り組み）を，Jing-Lin Lo さんが作業の力の根源を概括したものを発表していました．演題発表は，自立と作業の関係，企業で働く人を対象に仕事の意味に関する研究，脳血管障害のクライアントとその介護者の共作業に関する研究があり，それぞれ研究デザインがしっかりしてい

る印象を受けました．2日間のシンポジウムは非常に内容が濃く，台湾の作業療法士は英語が堪能でよく勉強していることに驚きました．ワークショップの時にすぐに文献を取り出し，インターネットで検索していました．参加者の話では作業を基盤とした作業療法はまだ台湾では少数派だそうです．今回の経験を通してお互いの国がシンポジウム，セミナーに参加し，交流できたら良いのではないかと思います．台湾は福岡空港から飛行機で約2時間半と比較的近いです．私はこのつながりをどのように発展させていこうかと現在思案中です．皆様も行ってみませんか？

第 10 回 SSO:USA のカンファレンス

聖隷クリストファー大学

小田原悦子

2011 年 10 月 20-22 日アメリカ合衆国ユタ州パークシティのディア・バレー・ロッジにおいて第 10 回 SSO:USA のカンファレンスが開催されました．参加したので，報告いたします．

パークシティーは山中にあるスキーのメッカで，シーズンオフだったので，静か，紅葉が美しく，夜は星がきれいなところでした．会場は豪華なスキーロッジでした．

20 日の午後 事前研修（カンファレンス前に，研究に関するワークショップが行われます．）今回は，文化人類学者の Catherine K Riessman が「質的データのためのナラティブ分析アプローチ」というタイトルで，自分の患者経験について話しました．研究者としての経験を捉えていたのと，あまりにも違うという内容の話でした．真摯な態度に研究者としての誠実さを感じました．

20 日夜 恒例のレセプションとポスターセッション 7 題

ユタ州はカウボーイの産地なので，みんな，

それにちなんでレセプションの入り口で渡された保安官バッジとスカーフをつけて, ウェスタンミュージックの演奏される中で, 片手のワイングラスを持って, ポスター発表を見て回ったり, 中央のテーブルで食事をしたり, 和やかなレセプションでした。

恒例: うたパーティー. 恒例となった歌の好きな有志が集まって, ワインを飲み, 深夜まで歌う。

私は, 震災後のアメリカからの援助に感謝をこめて, 「千の風になって」を歌いました。

21日8時からオープニングがあり, 8時15分から9時30分, Doris Pierce による, Ruth Zemke レクチャー

約束: 作業科学が約束することは? これまでに作業科学が行ってきたことと, これからの展望についてスピーチしました。

以後, 22日夕方までは発表 45 題 (各発表 15 分, ディスカッション 15 分.)

日本からは, 青山真美さん, マイクハドソンさんの「Thinking about Occupation Like a Mountain: Connecting Occupation, Nature and well-Being. 作業を山のように考える: Occupation: Individual Meaning and Governance in the Face of Global Environmental Change 持続する作業: 地球環境に直面した個人の意味と制御」には, たくさんの方の反応があったと, 青山さんが喜んでいました。私も, 「Retirement Experience as Transition to Old Age. 高齢期への移行としての退職経験」を発表して, 日本とアメリカの退職の違いについて質問を受けました。違う社会, スタンスから問われるのはおもしろいものです。

作業, 自然, 健康感をつなぐ」と「Sustaining このカンファレンスで発表するのは, 他の学会と違います。出ている演題が作業についてなので, 感激。作業について議論ができるこ

SSO 2011
Mountain Top Reflections:
Learning from Ten Years as a
Scholarly Community

October 20th-22nd, 2011 in Park City, UT
at The Lodges at Deer Valley Resort

Please Join Us for
the special
10th Anniversary
Celebration with
cowboys, cake, &
good fun.

Doris Pierce, PhD, FAOTA, endowed chair at Eastern
Kentucky, will deliver "Promise", the Ruth Zemke
Lecture in Occupational Science.

Catherine Kohler Reissman, PhD,
presents during the institute on
"Narrative Analysis: Oh,
I Can't Do That!, Illness,
Narrative and the
Anatomy of Hope"

SSO-USA
Society for Occupational Science and Occupational Therapy

とと, 参加者の育てるような姿勢が魅力です。プログラムにアクティビティーのセッションがあるのも楽しい経験です。みなさん! 参加しましょう。

2012 年はオレゴン州のポートランドで 10 月 5-7 日に開催予定です。要約の締め切りは 2 月 15 日です。詳しくは, www.sso-usa.org/。

編集者からのお知らせ

お知らせなど, このニュースに掲載したい記事がある会員は, 西野歩 nishino@sigg.ac.jp まで, お送りください。ニュース発行は年 2 回の予定です。近藤知子・西野 歩

次のページに来年度のセミナーポスターが掲載されております。

第 16 回 作業科学セミナー

作業科学からの架け橋 作業療法へ、学際領域へ、そして未来へ



【基調講演】

講師：ドリス・ピアース (Doris Pierce)
(イースタンケンタッキー大学 教授)

【シンポジウム】

シンポジスト：ルース・ゼムキ (Ruth Zemke)
(南カリフォルニア大学 名誉教授)

■ 佐藤剛記念講演

講師 近藤 知子 (帝京科学大学 教授)

■ 特別講演

講師 道信 良子 (札幌医科大学 医療人育成センター 准教授)

■ ワークショップ

ファシリテーター 小田原 悦子 (聖隷クリストファー大学 教授)

日時：2012 年 7 月 15 日 (日)・16 日 (月)

場所：札幌医科大学 臨床講堂
(札幌市中央区南 1 条西 16 丁目)

● 演題発表 (口述, ポスター)

● 演題募集と事前申し込みについて

平成 24 年 1 月より演題募集と事前申し込みの受付を開始します。

募集要項、参加申し込みについては、日本作業科学研究会のホームページを通じてご案内します。

● 問い合わせ先：第 16 回作業科学セミナー実行委員会

E-Mail : secretariat@jssso.jp (2011 年 12 月まで)

実行委員長：坂上真理 (札幌医科大学 作業療法学科)

Photo Miyako Nara